HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ことわり」という認識 ： 『夜の寝覚』男主人公と『源氏物語』
Author(s)	宮下, 雅恵
Citation	国語国文研究, 129, 43-56
Issue Date	2006-01-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93537
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_129-43-56.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「ことわり」という認識

――『夜の寝覚』男主人公と『源氏物語』――

宮下雅恵

一

『夜の寝覚』の男主人公論はなぜ少ないのか、というところから話を始めたい。「世に心づくしなる」「寝覚の御仲らひ」の相手としてほぼ全編にわたって登場する男主人公を、中心に据えて論じたものが非常に少ないという事実がこの疑問の前提となっている。その理由として容易に想像できるのは、まず女主人公・中の君＝寝覚の上が明らかに中心人物として語り出されているこの物語においては、全てが女主人公に収斂していく構造を持つため、必然的に彼女中心に読まれてきたから、ということである。この他、物語の中で具体的な人物像を結びにくいから、いわゆる「成長」する女主人公と違い男主人公は「成長」しないから、叙述が散漫・平板だから、などと考えられてきたことがあげられる。結果として、女主人公論の添え物のようにして必要に応じて言及される、それが男主人公の『寝覚』研究史におけるポジションだったのである。

しかし「心づくしなる」「御仲らひ」の相手として、あるいは一登場人物として、男主人公をめぐる表現分析はやはり必要ではないか。女主人公中心主義によらない分析は可能であるしそこから逆に女主人公を振り返ることもできるだろう。

具体的には、例えば永井和子『続　寝覚物語の研究』[注1]が「心的深化を示さない」「観念的存在」「自身で反省めいたことを考えることはあまりない」[注2]とし、また野口元大『夜の寝覚　研究』[注3]が「ヒロインの心を……ほとんど理解していない」「相手の身になってみるやさしさを欠いた誠実」[注4]とするような男主人公像の、いわば再検討が必要ではないかということなのである。

そこで『寝覚』の男主人公の心情パターンを明らかにするために、「ことわり（なり）」という言葉を手掛かりとする。なぜなら、この物語では「ことわりなり」四十六例、「ことわり」三十一例と、『源氏物語』と比べても用例数が多く、さらに男主人公（中納言、内大

臣などの呼称で示される）が「ことわりなり」「ことわり」合わせて三十二例と、用例のうちの半数近くを占めているからである。このことから男主人公の心的傾向を示すことばのひとつとして「ことわり（なり）」を挙げることができる。

小学館『古語大辞典』によれば、

> 万葉集・竹取物語には名詞「ことわり」三例のみ、宇津保物語では、形容動詞とみるべき例をまじえて「ことわり」七例だけで、動詞の例はない。蜻蛉日記は「ことわり」八例、「ことわる」二例である。源氏物語は名詞二九例、形容動詞一五〇例に対して、動詞一二例を数える。〔原田芳起〕

という。このことから『源氏』本文との長短の違いを考えても『寝覚』の用例数は多く、さらに男主人公についての用例の多さは注目に値するべきものであることがわかる。

さて「ことわり（なり）」という言葉は、状況やあるひとのおかれた境遇や心境を推し量りまた分析し「もっともである」「理にかなっている」という判断によって状況を飲み込もうとする分別を表すものである。この姿勢が、『寝覚』の男主人公の、人聞きをはばかる姿勢と結びつく身の処し方と関わっていることが予想される。一方「ことわりなれど」と逆接で用いられる場合は、状況を打開しようとする意志に結びつく文脈・展開が期待されることにもなる。

このように物語の展開に有機的に作用する「ことわり（なり）」について、以下『源氏』と『寝覚』を比較しつつ、検討を加えていく。

二

『源氏物語』の「ことわり（なり）」については、上地敏彦の論[注5]があるが、上地論文は『源氏』における「ことわり」の「文芸的内実」「文芸的意義」を明らかにすることを目指したものである。しかし実際に「ことわり」の用例ひとつひとつを見ていくと、以下に述べるような、他の人物に対する光源氏という主人公の特異性が明らかになる。

A（藤壺の）おぼし乱れたるさまもいとことわりに、かたじけなし。（若紫、一―一九六）[注6]

B常よりも心苦しげなる（六条御息所の）御けしきを、ことわりにあはれに見たてまつり給。（葵、一―三〇二）

Cいたうわづらひ給し人（＝葵の上）の、御なごりゆゆしう、心ゆるびなげにたれもおぼしたれば、ことわりにて御ありきもなし。（葵、一―三〇九）

D（嘆く右近に、源氏）「ことわりなれど、さなむ世の中はある。別れといふもの悲しからぬはなし。とあるもかかるも、同じ命の限りあるものになんある。思ひ慰めて、われを頼め」との給ひこしらへて（夕顔、一―一三四）

Eとりわきてらうたくし給し小さき童の、親どももなくいと心ぼそげに思へる、ことわりに見給て、（源氏）「あてきは、いまはわれをこそは思ふべき人なめれ」とのたまへば

（葵、一―三二二）

F（藤壺が春宮のことを）我にその罪を軽めてゆるし給へ、と仏を念じきこえ給に、よろづを慰め給。大将も、しか見たてまつり給て、ことわりにおぼす。（賢木、一―三八二）

G六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、うらみられんに苦しうことわりなり、といとほしき筋はまづ思ひきこえ給。（夕顔、一―一二一）

H「……げにかくあはめられたてまつるもことわりなる心まどひを、……」（帚木、一―六八）

I「……よし、今は見きとなかけそ」とて、思へるさまげにいとことわりなり。（帚木、一―六九）

J（夕霧の元服を）二条院にてとおぼせど、大宮のいとゆかしげにおぼしたるもことわりに心ぐるしければ、なをやがてかの殿にてせさせたてまつり給。（少女、二―二八〇）

K（源氏、末摘花に返事）返さむといふにつけても片敷の夜の衣を思ひこそやれ
（あなたが衣を返すとおっしゃるのも）ことわりなりや。（玉鬘、二―三七一）

L（紫の上）目に近く移ればかはる世の中を行末とほくたのみけるかな
古言など書きまぜ給を、取りて見給て、はかなき言なれど、げにとことわりにて、
（源氏）命こそ絶ゆとも絶えめさだめなき世の常ならぬ中の契りを（若菜上、三―二四一）

以上は光源氏に関する例である。一見してわかるとおり、連用形「ことわりに」や終止形「ことわりなり」で順接の文脈が多く見られる。

「ことわり」と思う対象は、A「藤壺の惑乱」B「いつもよりも心苦しそうな、六条御息所のご様子」C「重く臥せっていたなごりの葵の上を心配する人々」D「主人を亡くした右近の嘆き」E「身寄りもない童の不安な様子」F「不義の子に代わり自らが罪を引き受けようと仏行に励む藤壺の様子」G「六条御息所の惑乱、恨まれる自分」H・I「思い悩む空蟬の様子」J「夕霧元服の儀を見たがる大宮のお気持ち」K「衣を返すという末摘花の気持ち」L「定めなき世の無常を嘆く紫の上の様子」となっている。

思う相手の心情や置かれている状況などを推し量り、「もっともなことだ」とのみこみ理解を示す姿勢が著しい。

ただし次にあげるように会話文中の例では、

M「うちつけに、深からぬ心のほどと見給らん、ことわりなれど、年ごろ思ひわたる心のうちも聞こえ知らせむとてなん。……」（帚木、一―六七）

N「げにうちつけなりとおぼめき給はむもことわりなれど、
初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖も露ぞかはかぬと聞こえ給ひてむや」（若紫、一―一六四）

O「二条院には人迎へ給ふなり」と人の聞こえければ、いと心づきなしとおぼいたり。うちうちのありさまは知りたまはず、さもおぼさむはことわりなれど、心うつくしく例の人のやう

にうらみの給はば、われもうらなくうち語りて慰めきこえてんものを……」　（紅葉賀、一―二四四）

P「数ならぬ身を見まうくおぼし捨てむもことわりなれど、いまは猶言ふかひなきにても、御覧じはてむや浅からぬにはあらん」と聞こえかかづらひ給へば　（葵、一―三〇〇）

などのように「ことわりなれど」と逆接で用いられ、相手の言い分を認める姿勢を示した上で自分の言い分を提示しようとする文脈になっているものがあるが、用例数はさほど多くはない。これらは会話文ならではの心理的かけひきがはたらいているといえそうである。

三

では光源氏以外の男たちの例はどうか。

a（柏木）ことわりとは思へども、（小侍従は）うれたくも言へるかな、いでや、なぞ、かくことなる事なきあへしらひ許を慰めにては、いかが過ぐさむ。　（若菜下、三―三一〇）

b（柏木の文）「……いかがなりぬるとだに御耳とどめさせ給はぬも、ことわりなれど、いとうくも侍るかな。」　（柏木、四―五）

c女君（雲居の雁）は帳のうちに臥し給へり。入り給へれど、目も見合はせたまはず。つらきにこそはあめれと（夕霧は）見給もことわりなれど、憚り顔にももてなし給はず。　（夕霧、四―一四四）

d（匂宮は中の君を）よろづにこしらへ給へど、「心ちもなやましくなむ」とて入り給にけり。人の見るらんもいと人わろくて、嘆き明かし給ふ。うらみむもことわりなるほどなれど、あまりに人にくくもと、つらき涙の落つれば、ましていかに思つらむと、さまざまあはれにおぼし知らる。　（総角、四―四六五）

e（中の君が）泣きぬべきけしきなる、すこしはことわりなれば、いとほしけれど、（薫）「これは咎あるばかりの事かは。……」　（宿木、五―六七）

f（薫の文）いたづらに分けつる道の露しげみむかしおぼゆる秋の空哉

御けしきの心うさは、ことわり知らぬつらさのみなん。聞こえさせむ方なく。　（宿木、五―六九）

g（中の君が人目を気にして中に入ったので、薫は）ことわりとは返々思へど、なをいとうらめしくくちをしきに、思ひしづめん方もなき心地して、涙のこぼるるも人わろければ、よろづに思ひ乱るれど、ひたぶるに浅はかならむもてなし、はたなをいとうたて、我ためもあいなかるべければ、念じ返して、常よりも嘆きがちにて出で給ぬ。　（宿木、五―八五）

h宮、かくのみ猶うけひくけしきもなくて、返り事さへ絶え絶えになるは、かの人（＝薫）のあるべきさまに言ひしたためて、すこし心やすかるべき方に思ひ定まりぬるなめり、こと

わりと思すものからいとくちをしくねたく

（浮舟、五―二五一）

ｂｃｄ「ことわりなれど」ａ・ｇ「――とは思へども」ｆ「――知らぬ」ｈ「――ものから」など、目につくのは逆接の文脈ばかりである。光源氏の「ことわり＋逆接」の例とは明らかに異なり、これらの例で後の文脈に続くのはｂ「うし」ｃｄｆ「つらし」ｇ「うらめし」ｇｈ「くちをし」ｈ「ねたし」など、恋の恨み言が非常に多いのである。これは光源氏には見られなかった発想である。

またそれぞれ「ことわり」と思う対象について確認しよう。ａが小侍従の態度について（しかもこれは若菜下巻頭におかれており重要性に注意すべきであろう）・ｂ「（私が）どうなったかとだけでも耳をとどめてはくださらない」ことを嘆く柏木の思い。ｃ「雲居の雁が夕霧と落葉の宮とのことで心痛めているのだろう」ことを「もっともだ」としながら特に憚る様子もない夕霧。ｄ「中の君が自分（＝匂宮）を恨みに思うこと」・ｈ「ただこのように承引する様子もなく、手紙の返事までも途絶え途絶えになるのは、あの人が、あるべき様に言い含めて、少し安心できる方に思いが定まったのだろう」という匂宮。ｅ「（中の君が急に接近した薫を非難して）今にも泣きそうな様子なのを、もっともではあるが」といって口説きにかかる薫。ｇも同様の薫の思いである。ｆは「ご様子の情けないことは道理ともわからないほどのつらさ」というが、手紙文なので多少相手に対するかけひきがあろう。

いずれも相手の薄情さや自分への恨みごとに対する反応であり、〔ことわり＋逆接〕は男君たちの弁解や恨みごとへと転じる文脈で語られている点に共通性があるといえる。

光源氏に関する「ことわり」が、相手の状況や心情を道理とわりきって飲み込む態度を示していたのに対して、彼らのそれは「ことわり」と納得する枠に収まりきれないことを示している。このように「ことわり」に注目すると、光源氏と柏木・夕霧・匂宮・薫との対照性が明らかになる。そのように読めるように、『源氏』は語られているといってもよいだろう。

四

ここまでは光源氏とその他の男君たちとの姿勢の違いについて「ことわり」を通じて指摘した。では『寝覚』の男主人公はどうだろうか。第一部の例から順次見ていく。

1（対の君が訴えに耳を貸さず文も受けつけないのを、男主人公）ことわりに、うらみやるべきかたなく、我も人も、あひなかりける人違へに、あらぬ名のりを変へつつ、はかなく空にただよひて、互ひにかかる契りの、前の世まで恨めしきに、「身を知らずは」と、心は思ひなされず。「心づくしなりや。いかにせむ」とのみ、明け暮れはわぶる気色もてかくせど、いかが人も思ひ咎めざらむ。（七七～七八）[注7]

2（対の君）「……そのおもむきのさまざまに乱れさせたまはむ、たが御ためもいとあいなく。行く先まではたどり思ひたまへ

侍らずや、ただこの際は、いかで人にしらせじと、嘆き思ひたまふるばかり」と言ふ。げにことわりなるに、（男主人公は）言ふかたなき涙のみつくして　（九二）

3（男君は、対の君が伝言や文を受け付けないのを）すこしことわりなれど、「いみじくあるまじく便なきことといへども、いとかくしもあるべきことか」と心憂けれど、我も、ひとへに人目をつつまず、押し破るべきことの様にはあらねば、沸きかへる心地して忍び過ぐしたまふに　（九八）

まずは順接の文脈で「ことわり」が出てくる。その対象はいずれも対の君をはじめとする女主人公側の女房たちで、彼女の態度がすげないこと、またいかに人に知らせないかに腐心していることに対して「もっともだ」と思い、その結果として「うらみやるべきかたなく」「言ふかたなき」と行動は閉塞する。3は逆接だがそのあとは「……押し破るべきことの様にはあらねば」とやはり自制につながっている。

このような自制の積み重ねの後に出てくるのが次の4である。

4（中の君に添い臥した男主人公にむかって、対の君）「あが君や、などかくあやにくに、心憂き御心にかあらん。いとかく思ひやりなくなどは、よも、とこそ思ひきこえさせつれ」と、いみじと思ひてあはむれど、（男主人公）「すこし世のつねにもてなしたまはましかば、つゆの心を慰めてこそはあらましか。こ(注6)とわりながら、いとどあとを絶ちたまふ恨めしさに、現心もなくなりにけるぞや。ともかくも、なのたまひそ。ただあち寄りて、さりげなくもてなしたまへ」とのたまふに、言ふかひもなし。　（九九～一〇〇）

自制に自制を重ねた男主人公はついに「現心もなくな」ってしまい中の君のもとに侵入するに及ぶ。人聞きを慮る基本的な彼の造型には似合わぬ思い詰めぶりであるといえる。

5（男君は、対の君が女君の辺りに一分の隙もないようにしているのを）いみじく心憂けれど、げにそれもことわりなれば、夜は寝覚め、昼はながめくらしてのみ過ぐしたまふ気色　（一一〇）

6「あなあさましの御ことどもやとおぼすに、（中の君側の人々が）いとど、憂さに、かけはなれゆくは、ことわりかな。いかに見聞き思ふらん」と思ひやる　（一七七）

7（少将の君に、男君）あさましくあとを絶ちたるさまの恨めしきを、泣く泣くのたまひて、かつは「憂き世の有様を、げにかくおぼし飽き果つるも、ことわり。されど、それは様にこそよれ。……」　（一九二）

8「さても、少将、からくなむ。渡りぬるとばかりは告げよかし。ことわりながら、あまりたけくも、我を放たるるかな」と、恨めしきにも、忍びがたければ、

（男主人公の文）思ふらむ憂さにもまさるいまとだに告げで入りにし人のつらさは　（二〇四）

5〜8も1〜3と同趣で対の君側の対応のすげなさを「もっともだ」と考える。男主人公は再び自制に入り、中の君側の人々の心境を思いやる(5、6)。しかしその後、7で少将の君に訴えかけ、8で手紙をしたためるに至る。〔自制→行動〕のパターンがここでも繰り返されている。

次は男主人公の「恨めし」という心情が引き出されている箇所である。

9(男君は、入道殿が風邪をひいたので中の君もそちらへ渡った、と少将の君が言うのを聞き)「さる御言づけなくとも、ただ、ただ、『あるまじう、便なきことなり。めざましう、つらくもあるを、かかる事な聞かせそ、となむ、のたまはせつる』と、ありのままに語らむは、恨みどころなきことわりにて、雪にまどふまどふも帰りぬべきを、あらはに、虚言、つきづきしくとりつづけらるるかな」と、恨めしげにおぼいたるを

(二一一)

10世の中いみじうつつましう、恐ろしう(中の君は)おぼして、かかる山里に、あるにもあらず心苦しうながめつつ、言はでおぼしたる御気色の、心細う、今日などもながめくらさせたまひつる御気色の、見たてまつる人もやすからぬよしを、これ(=少将の君)さへ、けはひなつかしくしめやかに、ことわりかなと聞こゆばかりうちいひて、涙落とす気色、いとことわりなるに、(男主人公は)え恨みも果てられず。さすがにいと聞かまほしく、問ひ聞かれて、なになり袖の凍りもやらず、流れ添ふ

(二一二)

9では「本当のことをありのままに語ってくれたら、どこにも恨みようもなくもっともなことで、雪道に心惑いつつも帰ってしまうだろうに」という仮定の中での「ことわりなり」であるが、実際にはそうではないからもっともなことだとも思えないし恨めしいのだ、という述懐になっている。「ことわり」が仮定と結びついている点で、光源氏の例Oと近いものがあることに留意したい。

10では少将の君が中の君の様子を「もっともなことだな、と聞こえんばかりに言って涙を落とす」のに対応して「ことわりなり」という心情が引き出されている。同じ理解の地平に彼は立っている。しかしこのあと、積み重ねられてきた「ことわり」という飲み込み・自制の果てに、彼は働きかけることもやめて相手の心を試すかのような沈黙に至るのである。

11ことわりと思ひ知るほども過ぎて、あまり心憂ければ、いとほしとや思ひ知ると、それより後、かき絶え、音もしたまはで、年もはかなう返りぬ。

(二一六)

「もっともだと思い知る程度も過ぎて」、「心憂し」という心情が彼を沈黙へと向かわせる。ここでは「ことわりなり」と認識する容認の限度が設定されており、その限度を明らかに超えているのだ、という記述になっている。このことからも、物語の結節点を示す「ことわり」の重要性がはっきりする。

以上の第一部の用例からは、中の君方の状況・心情を考えて「ことわり」と現状を飲みこむ男主人公の姿が読みとれる。それは中の君付き女房たちの「推し量ってください」という要求とも矛盾しない。

・（対の君）「……月日の過ぎはべるままに、いかにもてなしたてまつるべきかと、また言ひ合はする人もはべらぬままに、ただ朝夕心一つを乱りたまへる程は推し量らせたまへ。……」（九〇）

・（対の君）「……このほどよりは、いつよりもさりげなくこそ。かたはしにても心得る人出で来なば。ただ推し量らせたまへ。……」（九四）

このように「推し量り」を要求されている男主人公だが、たしかにその要求にも応えていた。

「我があるを、おのづから見聞き知りもやしにけむ。うちとけて出で入りもしつる、さはいへど、いかに見聞きつらむ。わづらふとのみ聞きわたるは、かやうの心乱れにこそありけれ。思ひ寄らざりけるよ」と、人の心のうちをさへ推し量るに、言ふかたなくぞあるや。（七五）

その後4に見たように思いあまって行動する男主人公だが、女主人公側から見れば、それは「推し量らせたまへ」との要求に反する、迷惑な行為であるはずだ。しかしそれは彼の思い詰め方が尋常ではないということの表現でもあるのだ。何しろ彼は「世の聞き耳ことわりうしなわぬ御心」（五一一）の持ち主である。あれほど心用意していたのに「現心もなくなって」しまうほど思いが深いのにそれがあだとなる、という展開になるのは必然であり、「恨む」男主人公像が引き出されてくるのもまた必然であろう。またその「恨み」はみずからの運命にも及ぶ。

「さばかりにほひうつくしかりしかたちに、ものをいみじう思ひ乱れて、世を捨てたまへる親の御陰に隠れて、いかばかり心細く悲しかるらむ」と推し量らるる面影の、ただ今向かひたる心地して、「その嘆きのままに、我をつらからぬやうあらじ」と思ひやらるるに、さばかりあはれなる人に、かう物思はする我が契りさへ、恨めしく悲しきに（二一〇）

中の君の心情を推し量りつつ、「ことわりと思ひ知るほども過ぎて」、消息も絶ってしまう男主人公の姿で第一部は終わる。

第一部の男主人公の「ことわり（なり）」と「推し量り」を手掛かりに、〔自制→行動→自制→沈黙〕に至るまでを概観してきた。女君側から要請される「推し量り」を男君は受け止め、女君側の心情を自ら推し量り筋道を考えて「ことわりなり」と飲み込んでいく。飲み込みきれなくなったとき彼は行動に出るが、それもまた「ことわり」と相手方を推し量る自制に回帰し、ついには沈黙に至るのである。「ことわり」が文脈上に置かれる重要性に改めて目を留めておく

必要があろう。

五

12（男主人公は）「なになり袖の氷とけず」と、嘆き明かしたまひてし朝より、あまりよろづのことわりを思ひ許し、心をもあながちにのどめ過ごす、ことわりも過ぎてまめやかに恨めしく、人目恥づかしきまでおぼし知らるれば、「いかが、のたまひ、おぼしなる。いとほしともや、おぼし弱る気色見ゆる」と、心みるとて、御消息もなくて　（二一二九）

一見、第一部の終わりと同じような場面に見えるが、実は物語は中間欠巻部を経て第三部に入っている。11と同様に「いとほし」と思ってくれるかどうか、相手方の心情を試すような感情が見られ、第一部末と変わらず接続しているように見える。ただし、二人の間に流れる時間の経過もあってか、男主人公が「ことわり」とのみこむ対象は、女主人公側の態度・状態全般から、女主人公その人へとむかっている。

13いとあはれげなる（女主人公の）気色を、いとど添へ増いたるに、いみじからむ過ちを、さしあたりて見つけたりとも、え咎め思ひとどむべうもあらず。「故大臣も、かくてよろづを消ちてし、ことわりなりや」と（男主人公は）思ひ知らるるものから、なほ、胸苦しきままに　（三一六）

これは、寝覚の上の夫であった故関白に同調する心情である。「よろづを消ちてし」という状態が寝覚の上ゆえであるので、彼女とも関わる例であるといえる。

14あらましごとには涙をさへこぼしつつ、さぞおぼすらむの推し量りごとを恨みのたまふに、（寝覚の上は）面赤みて苦しげにおぼいて、「かうのみよからぬものに、あはつけうおぼしよる、ことわりなりや。悪しうならはいたてまつりし我が御なるひぞや。かく言はれたてまつるにも、身よりほかに、つらきものこそなけれ。かばかり言ふかひなく、物思ひ知らぬ心にも、などて心憂かりし忍もじ摺にかはありけむ。それをあはれとおぼし知る人も、なかりけるものを」とのたまひて、忍びがたげなる気色のいみじさに、（男主人公は）「げに、ことわりなりや」と、かへすがへす、百返りおこたりを言ひ尽くいても、いとかう見るままに、いよいよめづらしう、類なき心地のみまさるままに、やすからず、うしろめたきなりけり。　（三五七）

男主人公の「推し量り」に対して、寝覚の上は「ことわりなり」と言い、「身よりほかに、つらきものこそなけれ」と我が身のつたなさを嘆く。それに対して男主人公も「げに」と彼女の訴えを飲み込むのである。お互いにお互いの心境を飲み込む態度が向かい合わせになっている。この構図は第三部で何度も繰り返される。

15（女一宮の具合が悪くなったという伝言に、女主人公は）いみじく心苦しげなる気色に、（男主人公）立ち離るべうもおぼえねど、「かく聞きながらおどろきて参らざらむも、いとあやしかるべし。さりとて、おびえおきて、程なく立ち返りなむを、我にてことわりと思ひ許すべきことならずかし」と、おぼしわづらひ、いみじくうち嘆きたまふ気色を、（女主人公は）「さなめり」とおぼしければ、かたはらいたく　（三九四）

ここも二人の推し量りが向かい合う場面である。

16「我を恨むるなどの気色にはあらで、いつよりもいみじう思ひ入りたりつる気色には、このことの聞こえけるにやあらむ。さらば、深くも世を憂しと、思ひ飽きなむかし」と思ふに、慰めどころなく、ことわりなるを、かなしくおぼしつづけて、つゆもまどろまれず。　（三九七）

寝覚の上の心情を推量した上で「ことわり」と飲み込む男主人公。以下、「ことわり」がまとまって出てくる箇所になる。

17「（自分が女一宮の許へ行ったきりだったという）その一筋にてだに、罪避るべきかたなきに、憂きことをさへ言ひののしるを聞き添へたらむ心地、いかでかは『憂し。いみじ』と思ひ離れざらむ」。かたがたに言ふかたなきことわりなる、ただ身を責むる心地して　（四一八）

18（帝からの文が寝覚の上に届き、男主人公）「何事につけても、ふり離れ、見えず知られじとのみおぼされたる、ことわりなりや」とうちながめ出でたまふに　（四一九）

19都のおぼつかなさも忘れて、その夜も、昔のことをさへ、かきつづけ、あはれに悲しくおぼしつづけらるるままに、泣く泣く恨み尽くいたまへど、聞きだに入れで、その夜も明けぬ。さてのみあらむも、いとすずろに、宮の御有様もおぼつかなからぬにはあらぬに、よろづに、（男主人公自身の）身のことわりをも人のつらさをも、いみじく言ひおきて、出でたまふ空もなし。　（四二〇～四二一）

20姫君（＝石山の姫君）、（女主人公に）見なれたてまつりたまひて後、いみじく恋しく思ひ出できこえたまひつつ、遠くさへ渡りたまひにけるを、心細く物悲しげにうちながめつつ、忍び音がちに屈じたまへるを、いとどことわりに、心苦しく（男主人公は）見たてまつりたまひて　（四二四）

21（女主人公が）我をば、こよなう浅く、心隔てある者に、心置き疎まるる、いみじきことわりに、言はむかたなきままに、御文を、日々に、立ち返り十枚ばかりに、立ち返りおこたりを書き尽くいたまへど　（四二六）

22（女主人公の体調が悪いのを知らぬ男主人公は）「ただ返り事せじと、のたまひなすなめり」と、つらう悲しくのみ思ひきこえたまひて、「あまり人にくく、際高なる御もてなしなりや。かくは見たてまつらざりつる御心を、あまりになれば、ことわり」とのみ心得おぼすに　（四三五）

「ことわり（なり）」の連体形、終止形、連用形が立て続けに用いられ、男主人公の「身を責むる心地」「ながめ」「心苦し」「（自分の）おこたり」という心情が引き出されている。しかもこれらの前に置かれた場面では、男主人公を、寝覚の上の思い悩む心情をおよそ正確にたどりあてている存在だとみなしている。

いつも、かならずうけばりもて出づべきものとは、おぼし寄らぬ有様なるに、ことわりなる御暇のなさを、恨めしうなども思ひ寄らぬことなから、殿の推し量り思しつるにたがはず、「あいなの身の有様や。いつも、ただ、かくぞかし。まして、今はとうちとけ頼み果てては、いかばかりなべき心の乱れにか。いかならむついでに、なだらかなるさまにて籠り居にしがな」とは、寝覚めの夜な夜な、おぼし明かさぬにしもあらぬに　（三七一）

寝覚の上の心中を述べる前に「男君の推し量りに違わず」と置き、つまり男主人公の推量は正しいのだと物語は言うのである。たしかに女主人公への彼の理解、推し量りは、十分に彼女がそう思うにいたる状態・心境を探り当てているように見える。このような飲み込みの積み重ねの上に出てくるのが次の例である。

23「宮（＝女一宮）の御心地のほど、ありしことども（寝覚の上の生霊の噂を）聞くごとに、をこがましくも妬くもおぼえしかど、さることこそあれときこえ出でむも、待ち聞きたまはむ（あなた＝寝覚の上の）御心地、いとものぐるをしかりぬべかりしかば、さることのほかのこと、いまだまねびだにせられでやみにしを、（あなたは、わたくしのことを）ひたぶるにおろかにつらきにや（お思いになるのですか）。かくことづけたまふ（かこつけて出家の決意をなさる）ほどの、ことわりにもあり、また幼う。さる人のうけひき思はむほどの心をば、違へてこそよからめ。いと思はずに、返りて浅かりける御心も、ただ我が身からとなむ、はづかしき」とのたまふ　（四五〇～四五一）

寝覚の上が出家の決意を固めていく心情の経緯を「もっともなことだ」と推し量り飲み込む男主人公は、ここへきて彼女の出家の決意を「幼う」「浅かりける御心」と断じる。このときの男主人公はそうでも言わなければ到底彼女を引き止められないと考えていたのかもしれない。それを耳にする彼女は「それほど重大なことども思いませんでしたのに」とかろうじて言い返すしかない。

このあと、実は彼女の長きに渡る不調は懐妊中ゆえであることを男主人公は見あらわしてしまう。そのとき彼女に発せられた言葉もまた、「心幼かりける御心かな」（四七六）であった[注9]。男主人公の前には彼女は理解不能の存在ではなくなり、彼は心理的に優位にたっていることが見て取れる。彼女は出家を断念せざるをえず、男主人公のもとに迎え取られるのだった。

23の場面はいわば「ことわり」の論理がほどけた場面であり、『源氏』にはない物語のありようなのである。

24（寝覚の上）「故殿の……（男主人公との仲にふれると私の様子が変わるのを見て）いみじき過ちしつとおぼして、ひきかへ、こしらへ慰め、思ひながら、かけてもかけたまはざりしものを。……（男主人公は私を）あまり心もなきものと、あなづりやすくおぼすなめりかし。いかに世を思ふらむなど、憚りおぼすところのなきよ。いみじく物思ひ知り、なべてならぬものに言ひ思はれたる人も、憂き我からに浅くなりぬる方は、その御心のけぢめもなかりけるをや」と、あいなく、我があながちにつつみ、従ひたる心を、悔しくおぼしつづけて、答へもせず、ただつくづくとうちながめ出でて、いと引き隠し、ことなしびにて入りなむとするを、（男主人公は）ひかへて、御心の内推し量り、気色見るに、いともいともいみじきことわりに、我があまりの心に、今より後のことをもこのついでにとり出でむと思ひて、くまなく昔恋しき気色を見るより悔しくなりて、ひきかへ、いみじく慰めこしらふれど、（寝覚の上が）さだに思ひつづけ、ながめたちぬれば、（男主人公は）姥捨山の月見む心地して　（五三九～五四〇）

23で見た二人の状況の裏返しになんとぴったり対応していることか。「自分のせいで思慮が浅くなっているお心」というのは以前男主人公が寝覚の上に言っていたことそのままである。しかしそう思われている当の男主人公は「御心の内推し量り、気色見る」だけの思慮があるというのである。彼の推し量りの正しさはここまでの物語叙述で保証されていることになろう。

そして彼はかつて彼女の夫関白が「こしらへ慰め」ていたように「いみじく慰めこしら」えようとするが、結局は「姥捨山の月見む心地」＝「なぐさめかねつ」、の状態に至る。彼は女君の心を理解はしているが、ときほぐすにはいたらないのである。結果としてそれは故関白に比して男主人公の力量が不足していることを露呈させる。〔自制→行動→自制→沈黙〕のパターンはここでも繰り返されていた。

25、26飽かずわびしく、とばかりながめ入りて、院に立ち帰りたまひても、おぼしたりつる御気色のことわりに、（男主人公）「故大臣の、よろづの罪を消ちたりける名残の心おごりに、我がいささか思はずなる一言葉をば、いと浅く、憂きものに思ひしみ入りたまへる、ことわりなりや」　（五四二）

たしかに「私（＝男主人公）の少し思いがけない一言を、とても思慮が足らぬつらいものと思い詰めてしまわれるのももっともなことだ」と、女君の思いを言い当てているが、その彼女の態度が「故大臣が寝覚の上のよろずの罪をなき物とした名残の心おごり」に由来するものだ、というのは、いかがだろうか。寝覚の上に肩入れする読者としては聞き捨てならないものに見えるだろう。例えばこのあたりが、本稿冒頭に述べた永井・野口両氏のような辛口の男主人公評価に強く作用しているのではないかと考えられる。そして女君の心情によりそい推し量ろうという男君の態度、「ことわり」という飲み込みの姿勢に重きを置いて読むことで男主人公の違う面が見え

てきたであろう。

六

『寝覚』の男主人公の「ことわりなり」と、それと関わっている「推し量り」をも手掛かりにして男主人公像を概観してきた。彼は、女房たちの要求する「推し量り」に応えるように女主人公側の状況や心情を飲み込み、それが重なると行動に出て物語を進展させ、さらにまた自制し行動に出、あるいは沈黙する〔自制→行動→自制→沈黙〕のパターンをくり返し含み持つのであった。第三部では女主人公・寝覚の上の心情を「違はず」推し量るだけの度量をもち、「ことわり」と飲み込み受け入れようとする存在として物語に保証されている。「相手の身になって考える」し、「反省めいたこと」も考える人物なのである。

彼は、光源氏も含む『源氏物語』の主要な男性たちの様々な要素を受け継ぎ組み合わせられた存在であるように見える。ただし、14、15、24のように、『源氏』には見られないような場面をつくりだす存在でもあった。そのような場面に『寝覚』の批評性が見えるという点で意義を見いだせる。またそこには男主人公像の基本線と同時に独自性も表れているのだ。

読者が女主人公に肩入れすることで生じる、男主人公と女主人公をめぐる評価の偏差については、ふたりを取り巻く語りの分析によって見えてくるものもあるのだが、別稿を期したい。

『源氏』において展開の要所要所に周到に配されていた「ことわりなり」ということばは、『寝覚』においても受け継がれているとおぼしい。またそのようにして『寝覚』の『源氏』に対する批評性が獲得されているともいえるのである。『寝覚』から『源氏』へとさかのぼってみることで、光源氏とその他の男たちとの差異があらためて際だつように見えてくるのではあるまいか。(注10)

注

(1) 一九九〇年、笠間書院
(2) 同書二九、九三、一〇〇ページ
(3) 一九九〇年、笠間書院
(4) 同書二一五ページ
(5) 「『源氏物語』の「ことわり」――その「もののあはれ」と近接する文芸的内実についての考察――」(「岡大　国文論稿」三十、二〇〇二年三月)、「『源氏物語』における「ことわり」の文芸的意義について――「あはれ」の対象たり得る表象内実の考察より――」(「岡大　国文論稿」三十一、二〇〇三年三月)
(6) 新大系本『源氏』では「ことはり」の表記だが、歴史的仮名遣いに統一して「ことわり」と改めた。
(7) 『夜の寝覚』引用は小学館新編日本古典文学全集により、私に記号等を付しページ数を示す。
(8) 島原本「ことはりなから」。前田本「ことはりなから」とあるのに従う。

（9）このあたりの機微については拙稿「病と孕み、隠蔽と疎外――『夜の寝覚』を手掛かりに――」（「日本文学」二〇〇一年五月）において論じた。

（10）この問題については、かつて拙稿「『をこがまし』の系譜――『夜の寝覚』の帝試論――」（「国語国文研究」一〇三、一九九六年五月）でも論じた。

（みやした　まさえ・北大大学院博士課程修了）